

恐怖（或妻の手紙）

多代さん、今日は私はあなたに寂しい手紙を——いえ一寸待って下さい、寂しいんだか悲しいんだか譯のわからない手紙を、（今私はさういふ氣持であるものですからね書かなければなりません。何から先に書き出していゝやら分らないけれど、とにかく私は今大變心が亂れてゐます。昨夜一晚眠らないで考へたけれど、考へても考へても矢張り同じ氣持です。足がふらふらします、思ひ出す——といつて思ひ出さなければならぬ程其事が私の心をはなれてればいゝのに、意地わるくこびりついてゐるのです——胸がどきどきします。でもねえ、今は心を落着かせよう、でないと自身で自分が何を書くやらわかりませんから。私はあなたに聞いて頂きたいのです、懇へたいのです。其心持だけは今もはっきりわかつてゐます、同じお友達でも、あなたは私どものやうに田舎にくすぶつてる者と違つて、學門に親したんでゐらっしゃる、いろんな世の中のことも知つてゐらっしゃる、第一あなたはいつともどんな目に遭つても、私のやうにでんぐりかへる程吃驚したり、慄おそへたりはなさらないのですもの、私はあなたを常に年上みたいと思つてゐるのですよ、どうかすぐに御返事を下さいね、だけど私はきつと昨日からまた眼玉が飛び出したでせうよ、咽喉も太くなったでせうよ、鏡を見るのが怖いからまだ見ませんけれどきつとさうでせうよ、こんなに胸がどきどきして息切れがするのですもの、ほんとうに是これだけで死ぬ人はないといひますけれど、パセドー氏病なんていやな病氣ですよ、どうしてかう私は因果なのでせう、あゝ、だけどほんとうに今は心を落着かせようね。

昨日——さう、いきなりそれを言ひ出してもおわかりにならないでせうね、だけどあなたは知つてらっしゃるでせう、私達の失なくなったたつた一人の可愛い坊やの外に主人には女の子がある筈だつていふ事を。私は昨日その子を見たのです——。

昨日は秋晴れのいゝ天氣でした。私はお縁側のところで張物をしてゐるし、婆やは柿の樹の下で洗濯をしてゐました。そして二人ともそれをすましてから、坊やのところにお墓参りしようとして朝から約束してゐたのでした。すると丁度十時頃だつたでせうね、私は其時何を考へてたか知りませんが、なんでもぼんやりしてゝ、ふと見ると、この町には見慣れぬ女の子が徳利を袖に抱へて、私の家の中を覗き込むやうにしながら、婆やの脇をすりぬけて行くのを見掛けました。婆やはふつと洗濯の手をとめて、其女の子の横顔を眺めました。そして不思議さうな顔して其後姿を見送うしろすがたつてゐましたつけ。だけど私はほんとうに何の氣もつきませんでした。たゞ見慣れないと思つたばかりで、顔はまだ見なかつたのです。

御承知でせう、私の家の前は通りではありませんが、其處をつきぬけると後の酒屋の、六尺などのころがしてある廣場に出て、つまり裏口から酒屋の店に行かれるやうになつてゐるのを。女の子はお酒を買ひに來たのですね、だから私は別に不思議とも思ひませんでした、尤も、何故わざわざ人の家の前を通るのだらう、表通りがあるのにと思ひました、けれども時々近所の人などはつひ近いものだから、挨拶して借りて通る事もありますから、あの子も誰かに近道を教へられて來たのだらうと思ひました。暫くすると女の子はまた歸りにも家の前を通りかゝりました。私は脊を向けましたが、下駄の音でそれを知りました。

『ちよつと ちよつと』と婆やの呼びとめる聲がしました。

『あんた何處だい？』

『……………』

『えゝあんた何處？』

年寄りのもの好きにと私は心の中で笑ひかけました。

『××町』

『ん ぢや今何處にゐんの？』

『みよし』

すると婆やは突然大きな聲を出して私を呼びました。

『おかみさん！ おかみさん！』

私は吃驚して振り向くと、婆やは立ち上つて頻りに私を意味ありげに手招きしてゐるのでした。

『なあに？ 婆や。』

『何つておかみさん！』

さう言つて婆やは、せつこみながら私の手を引つ張り、一旦脊を向けて行きかけた女の子の後から、

『姉ちや、姉ちや、あんた幾つ？』と、わざと振向かせるやうに聲を掛けるのでした。

女の子は振向きました。

そして私はハツとして其處に立ちすくんでしまつたのです——。

『わたし、十。』

女の子は臆せずに凝乎と私の顔を見ました。あゝ其顔をあなたに一目見せる事が出來たら、それからあの人にも一目……いや、いや、それは私には恐しい、此上もなく恐しい！

死んだ坊やの顔を、もう少し大きく女にしたやうな、一口に言へば——多代さん、其女の子は坊やの姉といつてもいゝ程よく似てゐたのですよ。そしてそれは恐らくほんとうにあの子の姉であるのでせう、他人の空似そらにといふには、餘りに似過ぎてゐます。あの子は父親似でした、それはあなたも私には全然似てゐない位だとさへいつか仰言おっしゃつた事がありましたわね、若しあの女の子が、坊やとは何のかゝはりのない者であつたなら、世間には私の夫と全く同じ容貌かほかたちを持つた父親があるといふ事になるのです。どちらにしても、何といふ驚いた不思議な事なのでせう。

私は家の中に駆け込んで了しましました。そしてふと気がついて見ると、坊やの佛壇の前うつぶしてゐたので、氣を落着けようと思つて今度は長火鉢の前に座つて煙草を燻ふかしました。あなたは私に何を今更に驚くと、却て不思議にお思ひになるでせうね、併しまあ其事は一寸あとにして、婆やが後からはいつて來て言ひました。

『ほんとに油斷がならない、おかみさんの親切を袖にして、子供にそつと父さんを見に寄越させたりする——みよしに來てるつていひやしたぞ。』

婆やにしては幾らか私を慰める積りだったので、けれども婆やもまだ私の心を知らない！

序ついででに申しますが、みよしは料理屋で、あの女の古巣です。それから女の子の婆やに答へて、町つていふのは、今あの女のゐる所で、こゝから五里ばかり離れてゐるのですね。

其事は私もとうから知つてゐました。それから女の子が常に

「私のお父さんはS町にゐるの。」つて言つてゐるといふやうな事も、あの女が今猶主人を忘れかねてゐるらしいつて事も、みんな心に疊んでゐました。それだのにその子が坊やに生寫しに似てたからといつて、何を今更に私は驚かなければならなかつたのでせう。

でもあなたは、私が、

「實は私はあの死んだ坊やの外に、あの人に子供があるといふ事は、其話は承認してゐたけれど、事實としては決して信じてゐなかつたのです。」と言つたら、成程と肯うなづく事が出来る代り、哀れなる女心よと、可哀いさうになつて微笑まれるでせう。でも、それも少し違ふのです。私がさう信じてゐたといふのは、決して自分で自分の心に目隠しをしてゐたのではなくて、それは夫を信じ、夫の言葉を信じ尊重する事だつたのですから。

それをわかりよくする爲めに、茲こゝで一寸夫の生活や性行やを説明しなければなりませんね——私も書いてゐるうちに今は大分心が落着いて來ました——でもあなたは疾とくに私達の大體の事は知つてらつしやるのだから、簡單にするとして、御承知の通り私どもの

商賣は、材木商なんていふ商賣は、どちらかといへば派手な商賣ですからね、それに婆や一人を對手にして獨身でゐた主人は、お客を皆みよしに案内して、其處で取引上の話でも何でもやるのが習慣のやうになってゐたのです。従つて其處の藝者達とも懇意になつて、私が嫁かたづいて來てからも、よく藝者達が家に遊びに來たものでした。妻次つまじも其うちの一人でした。併し彼の女めだけはたった、一度私に顔を見せたゞけでした。或は私を見に來たのかも知れませんが——とにかく其頃の私は、愛情といふものも深く知らなかつた代りには嫉妬するといふ事も餘り知らなかつたのです。世馴れた妓こ達たちが

「おかみさん、おかみさん」とたてゝくれるのをいゝ氣になつて、玉ぎよくをつけて遊ばしてやったりしたものでした。第一さういふやうな遣り方かたが、夫の商賣に必要なのだとさへ思ひ込んでゐたものですわ。

其うちに妻次は子を生みさうになつたのです。父親と目もくされたのは、主人の友達でやはり同商賣をやつてゐる東京の人でした。けれどもさういふ事が表向きになつては、非常に家庭がむづかしくなるといつて困つてゐたのを、主人うちがあゝいふ氣象なものだから、

「よしそれでは俺が引き受けてやる！」といつてわざと手當ても自分の懐から出して、無事に妻次を産う褥じよくにつかしてやつたのです。

間もなく妻次が生んだのは女の子でした。

併ししか私は直接其話の場に立會つた譯でもありませんから、今は何といふ事も出來ませんが、私は何處までも夫を信じてゐました。そして人が何といはうと、随分陰口は耳に這入りましたが、私は笑つて聞き流してゐたのです。其噂を打ち消す事は、

「よし引き受けた！」と一旦男が口外した以上、それは主人の男を潰すことだと思つて居ましたから、私はそれに、物の陰に生活してゐるやうな妻次母子おやこの身の上も可哀いさうだと思ひました。それですから當時は随分主人の知らない、私らしい助力も及ばずながらしてやつてゐたものです。併し白状しますが、それは決して妻次の生んだ子は主人のではないと思ひ込んでゐたからです。若し果してそれがあの人の子であつたとしたら、さあ私はどんな風に扱つたものでしたらうねえ……まあ併しそれはこれから考へなければならぬ事です。

何はとまれもう十年の月日が経たちました。其間には私の病氣やらあの恐ろしい失敗の破産やらで、私共は見る影もない素寒貧すかんびんになつて了しまひましたが、それでもあの可愛い坊やが生れた爲めに、ほんとにどれだけ幸福に暮す事が出來たでせう、お互に貧しく苦しい思ひをすればする程、夫は妻を劬いたはり、妻は夫を助けるといふ風になつて、私は初めて愛情と

いふものを知ったと思つたのです。それにどれだけあの坊やが、常に私共の光りになつてくれたことでせうか……それなのに、あのたった一人の私共の坊やは死んでしまったのです、えゝ死んでしまったのです！

其嘆きは私の腸はらわたに喰ひ入り、其痛みは今だに私の骨盤に残つて居ます。さうして其痛みより外には私は今の自分に何事も感ずる事が出来ない様になつてゐたのです。増してや私は疾とうの昔に妻次母子の事などは忘れ去つてゐました。

もう餘り際限もなく長くなりますから、はしよつて申しませうね、多代さん、今突然にあの女の子が出現したのは、私の運命にどうなれていふことなのでせうね、あの顔を一目見て、あの何も彼も承知してるやうな、

「あなたはお父さんのおかみさんですね、あなたは幸福しあわせですわ、いつもお父さんのお傍にゐられるのですものねえ、わたしのお母さんは可哀いさうよ。」とでも言ひさうなあの老ませた眼付に、繁々と見られた時、私がどんなに生れて初めての驚きと、怖れと、疑惑とに捕へられたかを察して下さい。

あゝどういふ間違ひが其間あいたに伏在ふくざいしてるのでせう、私は夫を疑はなければならぬのでせうか、それとも主人自身も、自分の眞實の子があゝしてある事を知らないでゐるのでせうか、その子の眞實の父を知る者は、その母親一人より外にはないと誰かゞ申しましたね、さうとすれば、あの子の顔の語つたところを見て、私はすべてを悟る事が出来るやうな氣がします。

疑惑はもう拂ひ退けませう、驚きも今は大分鎮まりかけました、たゞ其後に残るこの恐怖——何か常に私共の生活の隙を窺つてる者があるといふやうな、その厭な氣持をどうしませう、多代さん、私はどうしたらいゝでせうね、勿論何もさうした女があるからといって、今更驚き慌てる程、私共の間柄はぐらぐらしてはゐやしませんけれど、私は自分の子を持つて以来、非常に親子の關係の並々ならぬのを知つてゐます。そしてそれは尊びもします、父と子の間柄を尊重すればこそ、また子を持った母親の心持に同情出来ればこそ、私にはどうしても其事が恐ろしいのです。

私はあの子を引取らなければならぬのでせうか、引き取つた方がいゝものでせうか、ですけれど、ですけれども多代さん、私は耻はづかしいけれどもあの子を可愛いがることは出来ないでせう、それはあながち嫉妬心ばかりでなく、あゝまで物心ものこころがついてしまった女の子ヲねえ、それに一寸商賣柄、もう私共の畑には合はないやうに育てゝあることだらうと思はれますよ、あの容子ようすでは。

主人は今上京してゐます、多分もう二三日は歸れないでせう、その前に私はいろいろ考へて置きたいと思ひます、どうか後生ですから、あなたの知恵を貸して下さい、いろいろ恥かしい事を打ち明けて主人には氣の毒なやうな氣がしますけれど、私としては全く意外な事だったものですから、ついあなたに御相談に乗って頂かうと思ひたつたのです、前後取亂してお読み憎いか知れませんが、まあいゝ、あなたから、御返事をお待ちして居ります、どうかすぐに、ではさよなら。

【入力者注】以下の修正を行いました。

其心持抱けは↓其心持だけは

底本…「水野仙子全集」第四卷

初出…「婦女新聞」大正六年十一月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成三十年一月二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)